

所見

「本学における情報システムを取り巻く課題とは」

情報基盤本部副本部長 齋藤 孝道

ここ最近、大学を取り巻く状況は厳しくなる傾向で、一般社会から大学への要求も多岐にわたり様々な変化を求められております。しばし、大学人として厳しいご意見を頂戴することもあります。しかし、それらは単なる批判や中傷ではなく、昨今の閉塞した日本社会において、大学への期待と解釈できるのではないのでしょうか。その意味でも、明治大学には、一流の総合大学として、様々なことが期待されているのかと思います。

さて、少人数でたくさんのことに対処し生産性を高めることは、すべての組織に共通する課題であり、他に類をみない高齢化社会を迎える日本において、特に、大きな課題であるかと思います。その解決策の一つとして、情報システムがあります。ご存知のように、特殊な目的のために創られたコンピュータも、一般的な業務への適用が進み、更には、インターネットやモバイル端末の登場により、いまや社会基盤とみなされております。現在では、あらゆる組織において、その利活用が組織の将来や存亡を左右するとさえ言われています。しかしながら、どんなにコストをかけて構築した情報システムであっても、すぐに陳腐化するだけではなく、悪くすると、当初の目的とは逆に、業務効率に著しく悪影響を与えるケースもあるかと思います。情報システムとは、そこに留まることが許されず、常に、前進し続けていかなければならない存在なのだと思います。そのような観点から考えますと、情報システムについては、世の中の誰かが技術的リスクを背負って、新技術の研究、開発や導入を社会に先駆けて行い、それを世に還元していくことも必要となります。このことは、大学の役割の一つではないかと考えます。もちろん、大学においても、情報システムは、水道・電気・ガス・電話と並ぶインフラであり、易々と「実験」はできないということも言えますが、インターネットの黎明期にそうであったように、大学とはそのような役割を担うというのが「理想」とはなりませんかでしょうか。

もしかしたら、それは他大学でも同じなのかもしれませんが、そもそも実務から遠い私みたいな人間が述べるのは的外れなのかもしれませんが、本学に目を向けてみますと、前述した「理想」を語るには、やや厳しい印象を受けております。たとえば、私が3年前に本学へ移籍してきて、初めてネットワークを利用する際に、その有様には正直少し驚きました。それは、学内からインターネットを利用することが、とても面倒で、扱い難いものであるということです。私がインターネットに最初に触れたのが、十数年前で、その間、自分自身で小規模ながらネットワークを構築し運用した時期もあったのですが、本学のネットワークの運用・設計は、私がインターネットに最初に触れたときのイメージに近いものなのです。2008年現在、家で気軽にインターネットを利用することと比べると、本学のそれは「ユーザに優しい」とは言いがたいものでしょう。また、情報基盤本部で仕事をするようになって、さらに驚いたのが、様々な情報システムや付随する運用スキームが、アドホックに構築・策定されてきていることです。敢えて厳しい言葉で言えば、「おもちゃ箱」というところでしょうか。そのためなのか、全体像が把握されていない、もしくは、されにくいのだらうと思います。それは管理の問題もあるのかもしれませんが、そのような状況では、新たな試みを行い難く、実際、この一年でもいくつかの課題が浮き彫りとなりました。

たとえば、学内のユーザ認証に関しては、その典型例の一つであると考えます。一般の学生が、学内のPC教室からインターネットを利用する場合、まず、PCへのログインのための認証をした上で、さらに、インターネットを利用する

ための認証を行うという、複数回の認証が必要になるという課題がありました。それを(決してとりわけ先進的というわけでもないのですが)今風に、ユーザが一回の認証で済むように、システムを統合することを検討したのですが、今回は、断念いたしました。断念した理由はいくつかありますが、その一つには、複数の異なったシステムが存在していることです。異なったそれぞれの認証システムは、システムとしての相互連携性がほぼ皆無で、保持しているデータもまちまちとなっています。そのため、認証システムの統合は、多大な困難が伴うことが判明しました。このような状況を生み出した原因の一旦は、もしかしたら、情報システムを一貫してデザインをするという視点が不足していたのかもしれませんが。更に言うならば、大学の情報システムとはどのようにあるべきかといった議論が欠如していたためかもしれません。「こうあるべき」という観点が欠如した場合、やり易いことや、やりたいことから手をつけるということは、一般的にはありそうです。本学に囲い込んだモンスター達が、いつの日か、我々の手に負えない存在にならないか、とても心配です。

しかし、私が、これらが散在している状況以上に問題視したいのは、我々の認識のズレです。ややもすると、「立場が違ふと問題が問題でない」となっている状況に対して、「本学の情報システムはだれのものであるのでしょうか？」という疑問が湧いてきます。情報システムは、複雑化・高度化する一方ですが、実現することだけがチャレンジだった時代は過ぎつつあり、情報システム部門のレーゾンデートルを再考すべき時期にあるのだと思います。たとえば、情報システムに関する考え方も、「技術者中心からユーザ中心へ」と既に変化していますが、それは、どの程度共有し実現できているのでしょうか。このようなズレは、単なるコミュニケーション不足、リーダーシップ不足や組織的な問題だけが原因だとは思えません。個別の事情はいくらでもあるでしょう。しかし、そのことが、本学の情報システムやそれを取り巻くものの将来に影を落としていることは間違いなさそうです。

情報システムに関しては、特殊なモノ作りという要素が多分にあり、潜在的なリスクと将来得たい効果とをコントロールすることが重要だと思います。そのためにも、大局的な観点から、リスクをリスクとして認識し、更には、「理想」を具現化するための体制作りが急務なのではないでしょうか。